

共産主義者組織統一 準備委員会会報

No. 2

1966年5月15日発行

目次

結集をめぐって 東京労組グループの討論	1
労組グループの討論をふまえて 浅野太郎	4
よびかけに答えて 札幌在住 結集と統一をめざす共産主義者有志	6
準備委員会への要望 広島の国鉄労働者からの手紙	9
相互不理解を克服する対話を 内野壮児	17
資料=「共産主義者の結集と統一をめざす全国会議 組織統一準備委員会」発足にあたって	11
準備委員会事務局から	23

結集をめぐつて

―東京労組グループの討論―

五月十二日、東京で結集問題についての労組活動家の懇談会（第三回）が開かれた。

前回の会合は全国会議にむけて労組活動家を結集していくうえで大きな役割を果たしたが今回は全国会議とその後の準備委員会の経過報告を行ない、今後の運動の進めかたについて討議するために開かれたもので、官公労、公労協、民間の労組活動家約二十人が集まった。

はじめに全国会議について出席者の代表から、準備委員会の進捗状況について白川氏から報告があり、これについて活発な討議が行なわれた。発言は主として結集をめざす運動を広く大きくもりあげるために、新しい活動家に働きかけていく問題、現在の結集に批判的な人びととの交流、協力をつよめる問題、組織統一の準備過程を民主主義的に進める問題などをめぐって積極的な意見がのべられた。

最後により多くの人びとの協力を得ていくために、この懇談会として世話人会を設けて具体的な方法を検討し、働きかけていくことに決まり、五人の世話人を選出した。

世話人会は、会議で出された東京段階での中広い討論会の計画や労働運動の分野での活動の進めかたについての提案を具体化することになっている。

発言のおもなものは次のとおり。

△ 全国会議で一つの前進ががちとられ、気運が高まつてきたが、それ以後、結集への大きな流れがつくられているかといえは必ずしもそうはいえない。この波をいかにつくるかが現在の問題である。これは準備委員会に期待しているだけでは出てこない。むしろ準備委に期待をよせすぎているから出てこないともいえる。一部には、とにかく早くまとめてかつこうをつけようとの考えがあり、これにたいして結集のための運動をつくりだし、ここでの意見を準備委がくみあげ、整理しまとめていくべきで、時間をかけてもこれをするのが大切なのだとの意見がある。また、つくられるべき党はいかなるものかについても

異なる意見がある。こういう問題について、準備委員会の中だけでなく、いろんな場で討議していくべきだ。

△ 五月十一日のアカハタ主張は教条主義批判を打ち出しており、単に中共追従だといふだけの批判では有効でなく、結集の事業もより質を高めないと容易ではない。一方八回大会で、代々木を離れて以後、積極的に主体形成に努力してこなかったたので、こんどはやろうと思つても、いつたん組織を離れた人たちの再結集は非常に困難で、この壁にぶちあたっているのが現状だ。

△ 旧代々木の人たちだけでなく、安保の中で育ってきた人たちにいかに大胆に呼びかけ、結集していくかこそ大切だ。

△ 前衛の必要性を切実に感じていない無党派活動家のことをどう考えていくか。 いままでの党は、運動のガンにこそなれ、何の寄与もしてこなかった。この人たちに結集に参加したいという気持をおこさせるかどうかをもつとも大切だと思う。

△ 結集問題について話し合うことも大切だが、反対している人たちをも含めて労働運動についての経験の交流と学習の場を形成していく必要がある。労働運動に対応できなくて単なる義務感だけの結集運動は長つづきしない。

△ 準備委員会がまとめて発表した全国会議の「まとめ」と「よびかけ」は「くろうと」がみると苦勞のほどがわかるが、「一般の人たちがよんでもそれはわからないし、感動もわかない。「くろうと」の数はかぎられているし、大衆こそが第一に考えられなければならない。グラムシは「複雑な思想を単的な形で現わすことが大切だ」といつたが、そのことをかみしめて考えるべきではなからうか。党内民主主義の問題にしても、それ自身が目的ではないことをさとらなければ、大衆はついてこなくなる。

△ まだ結集に関心をもっていない人たちにたいしても日常の活動を通じて働きかけられるような政治方針がほしい。とくに労働運動についての政策など。それをつくり出すのが準備委員会の仕事であり、このため拡大会議を開くなどの形で意見を吸収せよ。

△ どこからが針が出てくると期待しても出てきはない。一人ひとりの運動の参加者

が自分たちの共同の努力で政策方針をつくりだしていくという気持で結集を進めていくべきだ。新しく参加してもらう人たちにも、そういう方向でいつしよにやろうと訴えていくべきだ。全国の各地域組織や諸グループからもほとんどん政治方針の案や意見を出すべきである。方針はつくらなければならないが、それをつくる過程をいかにするかに大切な問題がある。

△党形成の過程で運動の基盤となるべき層に働きかけ、その中で建設すべき党のゆたかなイメージを生みだすためにも、「会報」は討論誌的な性格をもつものにすべきだ。こうして各方面の意見を準備委員会に反映すべきである。

△準備委員会に傍聴をみとめてもらいたい。

△それぞれの産業で結集の対象者に具体的に働きかけていく仕事を進めることが大切だ。
△労働運動について知識人の協力をえるよう、研究部門のようなものを設けよう。

△東京段階での準備委員会をつくるべきである。その立場で予備作業としての話しあいを進めよう。

△東京段階では結集に反対している人たちも参加して、なぜ反対なのかを表明し、討論できるような会合を開くべきである。そして意見をたたかわせながら共通項を追求すべきである。

労組グループの討論をふまえて

浅野 太郎

去る五月十二日

共産主義者の「統一と結集」を目指す、東京の労働戦線の各グループの活動家が集まった。この会合では全国会議で選出された労働戦線代表の準備委員から、全国会議の討論経過及びその問題点が提起され、更には、その後開かれた全国準備委員会及び東京在住準備委員会での「アツピール」「まとめ」を含む具体的な作業と今後の展望が報告され、それに沿って討論が進められた。紙数と時間との関係で、その内容を逐一報告できないのが残念であるが、そこでの討論の中心になつた問題点を報告し、全国各地で活躍されている同志の参考に供したい。

2、

新しい党の物質的基礎を生産点で働く労働者、特に無党派の青年労働者に求めることは全国会議でも幾人かの同志から提起され、全員異議なしとの声で決定したことであるが、その後、準備会の具体的な作業や、各地での活動の中で、どれ程目的意識的に追求されているだろうか。これにたいしては、例えば社革の反対派（東京）に対しては具体的な作業は別として各々可成り政治的に配慮しながら話し合いを深めて行く方法が確認されているし、又その他の政治集団、それは革共「前進派」を含むトロ三派に対しても当面の結集には可成り困難を予想しながらも各々対処され、またされつつあるし、更には思想・文化・学術の各戦線にも、それらの組織の形態に即応するような話し合いの方法が進められている。私達はこれらの呼びかけや話し合いが「統一と結集」の作業にとつて極めて重要であることを確認するだけでなく、むしろそれらの作業自体が私達の承知している範囲では積極性に欠けている面があるように思う。

(4) 然し乍ら前衛にとつて不可欠な労働者に対し具体的にどのような結集への呼びかけが行なわれ、また、その意義について、討論が行なわれ、その中から多種多様な方法と工作が

生み出されたであろうか。

この点筆者を含め、全国会議で決定した「結集と統一」の事業の工作者である準備委員は深く反省されるべきではなからうか。

全国会議で強調されたことが、その後の準備委員会の作業の中で結果的に軽視された原因は一つに政治情勢に対する必要性から生じた早期結成を目指したスケジュールに作業内容全体が制約されていることに起因するのではなからうか。

第二回の全国準備委員会での討論の中で東京在住の準備委員を除く地方の準備委員の多くの同志が早期結集を訴えている事実と、その必要性を無視しようとしているのではない。

また、作業工程を無限に引延ばせば延ばす程「在るべき前衛党」が創出されるというのではない。早期結集が結果的に「こえ」と「社革」ないしは旧代々木の同窓会的統一に終わったのでは今日我々が追求している新しい党は生まれないことを再度強調しておきたいのである。「政治方針」「組織方針」がかりに新しい党にふさわしいものが出来たとしてもそれを生きいきと発展させる物質的基盤を持たなければ全く無意味なものとなることは明白である。

又それらの方針目体が結集の過程で、生産点で斗っている先進的な青年労働者のエネルギーと要求を反映し、さらに「余りにも非革命的な」代々木と長い間対決をし運動を進めて来た各戦線の無党派活動家の経験と英知を貴重なものとして汲み上げて行かない限り、新しい党にふさわしいものとして練り上げて行くことは出来ないであろう。このことがより広い、より深い結集へと結実して行くのではなからうか。

この集会での参加者の現況報告に共通しているものは、本来結集に参加されるべきはずと思われる代々木離党者の人たち、あるいは職場の活動家たちの腰が中々重いということである。全国会議が呼びかけるための手続上の誤りや欠陥が部分的にあつたにせよ、一定の波を作り出したことは、結集に今日反対を唱えている人たちも認めざるを得ない事実であつた。然し今日の状況は果たしてどうか。このままで良いのだろうか。多くの疑いと焦燥を持つは私たちだけであろうか。

このことは準備委員会の責任のみ追求すれば解消するという問題ではない。少くとも全

国会議に参加された全国各地の同志、そして今日意欲的に結集を目指し立上っている共産主義者全体の問題として促える必要があるのではなからうか。英知をかたむけ結集への波を自らの力で作りあげていく過程で、最も重要な一つとして生産点で斗っている労働者に對し、各々の立場から具体的な工作を進めることを常に忘れてはならない。

よびかけに答えて

札幌在住 結集と統一をめざす共産主義者有志

われわれ、札幌在住の、結集と統一をめざす共産主義者有志は、今回おこなわれた、共産主義者の結集と統一をめざす全国会議の「まとめ」と「よびかけ」を討議した結果、以下のような点の合意にもとづき、組織統一準備委員会にわれわれの意見をつたえることを決めた。

(一) われわれは、「まとめ」において、今回の全国会議が、日本における共産主義運動の新しい統一を実現するための貴重な第一歩であつたが、この会議が、「日本の革命的エネルギーの多くをまだ結集しえ」なかつたことを「卒直に認め」、「それらの組織や個人はもとより、さらに広範な革命的エネルギーを結集することの重要性」を確認している点を支持する。

われわれの主要な危機と不安は、今回の結集と統一もまた、わが国の共産主義運動の歴史に根ぶかい病根を払拭しえず、たんに反代々木幹部の政治的活動の舞台を提供することとまるとはでないが、という点にあつた。

この点の危機と不安は、現在においても、完全には解消しえない。なぜなら、建設すべき党の性格と不可分であるところの、否定され、克服されるべき過去の誤りとその自己批判の問題が、「まとめ」においても徹底して解明されていないからである。

まず、党内民主主義の問題では、「討論の結果、マルクス・レーニン主義党の組織原則

は、民主集中制であることを確認した」とあるが、このような表現は無内容であるとともに、なんら問題をあきらかにしてはいない。したがってそれに、過去の苦い経験にたつて「党内民主主義の実現、その組織的保障を確立すべきことが強調された」という付記をつけざるをえなくなる。このような思考様式を「タテマエ」主義という。原則を超歴史的に確認し、そのうえで問題の解決を法制とその運用にゆだねるやり方である。問題は、なぜ民主集中制の原則が討論されざるをえなかつたか、という点についての歴史的考察から出発してはじめてはつきりする。すなわち、民主集中制を法制的、支配技術的形態におとしめた思想への批判と、それに対置されるべき徹底的な民主主義の思想とその組織的定着の方途という方向で討論がすめられ、まとめられるべきであつた。

第二に、日本共産党の否定的遺産とその克服にかんするまとめの、形式的である点を指摘したい。このまとめからは、自己批判をめぐりてもとめられた「指導的同志」が、それは答えるという保障はどこにもない。われわれは、従来の「指導的」同志が、これら否定的遺産についての自己評価と自己批判をへずして、ふたたびあらたな結集の指導的位置を占めることに断乎として反対する。

第三に、モスクワ宣言、声明に対する意見の相違は、軽視することのできぬ問題をふくんでいると考える。われわれは、この二つの文書を「国際共産主義運動の自己革新の事業」のあらわれとする「まとめ」主文を支持するが、その視点に立つかぎり、この二つの文書の「創造的發展のために努力」という位置づけは、ことさら二つの文書にこだわる保守的、教条主義的な国際主義の残滓を感じる。われわれは、まさにこの文書を産みだした革新的潮流を推進すべき歴史的段階に立っているのである。われわれは、「日本のこえ」がしみつけていた、保守的、教条主義的なプロレタリア国際主義が、あらたな結集にしみこまないためにも、モスクワ宣言・声明の位置づけに関する追従主義的な評価を一掃すべきことをよく主張する。

(7) (二) われわれは、札幌および北海道の革新を求めつつ、分散状態にある共産主義者の現状について討議した結果、それらの人々が過去に負ってきたさまざまな苦痛や幻滅のふか

さにこたえつつ、かれらに真にあらたな勇氣と熱情の火をよびまし、まだ共產主義の思想を知らぬ多くの若い勤労青年・学生を結集するに足る魅力と力にみちた党の建設とは、決して早急には望めず、なおいくたの曲折を経ねばならぬものであらう、という認識を共通にもつた。

もつとも避くべきことは、柔軟で、生き生きと外へむかつてひらかれた行動の集團ではない、小さな半クロウト政治家集團が選挙目当てのようについてつくられることである。

第二には、思想・文化・芸術・科学における水準の高さを誇れる集團をめざすべきである。日本共産党は、かつてすくなくともこの点に関しては、日本の市民社会内で一定の地歩を占めていた。わが国の文化においては、依然としてマルクス主義は、他の発達した資本主義諸国とくらべて相対的に大きい比重を占めている。これに対して、共産党代々本派は、現在その管制高地を自ら放棄しつつあるといえよう。われわれ共産主義者は、高度に発達した資本主義国の革命において知的、道徳的ヘゲモニーをにぎることの重要性を、真剣に顧慮し、奮闘すべきである。このことが、若いエネルギーの結集におけるひとつのカナメでもあらう。

以上、組織統一委員会へ意見をのべるとともに、われわれ自身があらたな勇氣をもつて、全国の同志たちと呼応し、日本における共産主義運動の革新と勝利のために奮闘する決意をつたえるものである。

一九六六年四月二九日

札幌在住 結集と統一をめざす共産主義者有志

江 原 光 太
北 島 清 次

準備委員会への要望

Ⅰ 広島の国鉄労働者からの手紙

春闘も山を越し、メーデーを終ったところに、準備委員会会報の創刊号がときました。準備委員会の活動が、「活動計画」をたてる出発点で、もたついているという感じを受けました。

全国代表者会議が、一応成功したので、地方では、組織統一、結党と、とんとん拍子にことが運ぶように考えられていましたので、いささか拍子ぬけの感じでした。あまり時間がかかると熱がさめてしまうし、大切な政治的チャンスを再びとり逃してしまうのではないかといい心配も生まれています。私たちの職場の大衆も、新聞などで、かなり宣伝されたのに、その後の動きはどうなつたのかと疑っているむきもあります。

しかし、いろいろな意見がわかれ、組織を別にしてきた共産主義者が、一つになろうというのですから、大変なことはよく解ります。教条主義的傾向と修正主義的傾向と、両翼の傾向との闘争が不可欠でしょうが、今回の結集が、なによりも労働者階級の要求にこたえる政治的必要にもとづくものだということを忘れないで欲しいと思います。思想闘争の重要性を軽視するものではありませんが、一つの政治組織として、統一された政治行動を進めるなかで、より進んだ思想闘争が展開されるのではないのでしょうか。その基礎となるものは、「まとめ」と「よびかけ」で与えられている筈です。

(9) 中央での準備委員会の作業がおくれるということになれば、地方も、何時までも中央の「決定まち」のままではいると逆にくさつてしまう危険がありますので、地方の結集体も、ある程度独自の行動性を発揮して、これを組織として動かして行かねばならないのではな

いかと考えています。

私たちの国鉄中国地方共産主義者統一協議会は、広島地区の社革を中心に、広島・山口の「無党派」「共産主義者」——おかしな言葉ですが——で構成しています。全国会議への代表派遣らしい、結集への期待と自覚は強まっていますが、労組運動のグループ活動の面ではかなりの統一行動の組織化が出来ますが、かんじんの党建設の問題では、依然として「協議会」——対等の各グループの協議機関の域をでることができません。

だからといって、その「無党派」の諸君が社革に入るということは、今更不可能です。何とかして、単一の党的組織に発展させる方法はないかと考えているのですが、なかなかいい智恵が生まれません。そこで、中央より若干早く、たとえば「結党準備会」のようなものに再編して、少しづつ党的な規律のあるものに変えていくのも一つの方法ではないかと考えています。これらは、他の地方でも同じような問題として提起されていると思います。ただ、全国会議の「まとめ」では、地方段階の結集について、「適切な形態」とあるだけで、明確ではありませんし、全国準備委員会が、地方の準備委員会をつくり、その指導機関となるものではないと、報告されていますので、どうしたらよいか、ちゅうちょしています。準備委員会としての考え方はどうでしょうか。

国鉄広島第二支部では、四月二三日、共産主義者の統一協議会とは別に、労働組合活動家の「国労広島統一協議会」が結成されました。中心は社革ですが、無党派活動家の総結集をしたわけです。

国労広島第二支部では、これまで第一党が代々木、(元革同)、第二党が社革、第三党が民同という勢力関係で、社革が民同と連合して代々木をおさえるという勢力関係でした。しかし、統一協議会の組織化によって、これが第一党になりつつあります。

統一協議会は、一部の職場をのぞき、ほとんどの職場で、闘争の推進力になりつつあります。この力が強まってくるに従って、敵権力の攻撃も強まっています。四・二六のデモの弾圧にも、それがあらわれています。日共(代々木)の社革粉碎のキャンペニアは、一だ

んと強められています。民同との関係も、今迄のようにはゆかなくなつてきています。

私たちは、こういう状況のなかで、組織統一準備委員会の活動の進展を期待しています。

(国鉄中国地方共産主義者統一協議会)

資料

「共産主義者の結集と統一をめざす全国会議 組織統一準備委員会」発足にあたって

統一社会主義同盟全国委員会書記局

一九六六年四月十七日

一

「日本のこえ」、「新しい路線」などによれば、さる三月二十一日から二十三日まで東京で「共産主義者の結集と統一をめざす全国会議」が開かれ、「共産主義者諸組織の全国的結集を推進するため」ということで、その「準備委員会」が発足した。われわれ統一社会主義同盟は正式の招請を受けなかった。しかし、それは当然の措置であると思う。なぜならわれわれがこの結集にたいして反対し参加しないという態度を維持していることはあきらかであるからである。

二

- われわれが従来「大同団結」と呼ばれ、また「総結集」あるいは「結集」と称されてきた一連の動向にたいしては、終始批判的態度をとり、反対しつつづけてきた。とりわけ一九六四年十月十一日の全国委員会決議「前衛党形成をめぐる問題―われわれの態度」(平和と社会主義)第二八号掲載)において、基本的な見解を表明した。(この決議に反対・保留を表明した当時の二名の全国委員は、現在「統一有志会」として結集に参加している)。(1)

また昨年十一月に開催された第四回全国大会は、それまでにとつてきた全国委員会の態度を再確認した。

その基本点は、ここであらためて再確認するならば、

① われわれは日本における革命とのための綱領的路線において民主主義・社会主義革命とのための反独占民主主義革新と構造的諸改革の闘争と反独占の国民的多数派という根本路線のみが正確であると考える。だが、「結集」においては日共第八回大会綱領のワク内において革命の綱領路線を設定しており、賛成しがたい。

② 国際共産主義運動における論争と対立にたいして、われわれもまた積極的に介入するものであるが、その前提に自主的姿勢が確立しているべきであり、戦前、戦後を通じて、わが国の運動に根深い、国際権威主義の病根は絶ち切らねばならない。だが、「社革」にせよまして、「こえ」にせよ、こうした前提が薄弱であるか、あるいはかえつてこの病根を温存・育成するうれいをなしとせず、同調しない。

③ 前衛形成において日本共産党のみをその唯一の正統とみなすことなく、社会党ならびにさまざまな党派に属する前衛志向の活動家との同格、協同が確認されるべきである。だが、「結集」にはみずからを日共の正統派として位置づけるといふ不毛な発想から脱してゐない。

④ こうして、反代々木―反中共―親ソ連という不毛な発想とみずからを日共内正統派として積極的に位置づける展望は非生産的である。

以上を要するにわれわれの反対は、われわれが「社革新」から離れて、共産主義・社会主義の革新を志して統社同を結成したほんらいの目的に照らしてみるならば、自明の結論であつたのである。

三

ところで、過日に結成された「準備会」をめぐる諸動向は、こうしたわれわれの批判を再確認せざるをえない性格のものである。

第一の問題は「共產主義者の統一」こそ至上命令とする大義名分の内容についてである。

「こえ」と「社革」の合意は、国際共產主義運動の統一の回復を主張する、国際的主流の見地からひきだされている。また国内的な「統一」については、「総結集」はすなわち日共もふくめた日本共產主義運動の統一の回復を意味するように考えるものから、反日共系共產主義者の総団結として理解するものなどの複雑な差異をふくんでいるように思える。

この差異は、ある意味でかなり本質的なものであり、「準備委員会」以前の合意を基礎にするなら結局は日本共産党との統一の回復をめざす以外にはすみようがなからう。いまのところ、各派の我田引水の解釈がなりたつほどに、合意の内容はきわめてあいまいである。そして、このような内容における「統一と結集」のよびかけは、わが国におけるさまざまな共產主義、社会主義集団の分立の状況についてのかれらなりの認識とその浅さをしめすのである。

「統一と結集」のよびかけは、そのよびかけ主体における、国際正統主義と国内正統意識にもとづくものであつて、今日のさまざまな分立の現象にたいする現実的な認識に発したものでないことをしめすのである。

われわれはいま、一枚岩の国際共產主義運動の崩壊とその多元化の進行を眼のあたりにみている。国内的状況についていえば、今日ほど、全国的地方的に非共産党左翼がさまざまなグループを群立させていることは、かつてなかつたのである。そしてわれわれは、このような分立が不幸であると考え、その「統一」を主観的に願望することに先立つて、その分立をもたらしている状況の歴史的意味を理解しなければならないと思う。わが国における新たな前衛党の創出の努力も、このような現実にたいする深刻な認識から出発せず、単なる教条や願望にもとづくものであるかぎり、不毛なものとして終わらざるをえないのである。

四

現在わが国にはさまざまな非共産党左翼の集団が存在する。それは、全国的な党派的形

態を追求するものから、思想サークル的存在としてみずから位置づけるもの、あるいは地域的・職場内の活動者集団として自己を維持しているものまで含めれば、きわめて膨大な数に達する。一九五〇年前後から日本共産党に失望した無数の無党派的存在が個人としてあるいは集団としてこのように存在するだけでなく、共産党という存在に一度も何らかのつながりをもたなかつたところの若い世代の活動家もまた、このなかで一定の比重をもつて存在している。

さらに、われわれは、現在、日本社会党のなかにあつて科学的社会主義にもとづく革命的党派に日本社会党を変革することをめざしているいくつかの集団小党派運動をも無視することはできない。かれらをたんなる社会民主主義左翼として、われわれとの質的区別をもつものとするのは正しくない。

もちろん、これらの集団のそれぞれは、そのイデオロギー的体質において、政治的性格において大きな差異をもつ。これらを、たんに反日共的共通項において概括することはできない。したがつて、少集団の分立という形態上の問題のみならず、トロツキズム・ネオ・トロツキズム、日共の存在を本質的に否定しえない分派的存在からいわゆる構造改革派といわれるわれわれにいたるまでの政治的思想的分岐がもつ複雑性を考慮すべきなのである。われわれは、そこに今日の共産主義・社会主義運動が当面している深刻な歴史的過渡段階の反映をみる。

つまり、われわれは、戦後の日本階級闘争のなかで無数の挫折と犠牲者・離反者をうみだしてきた日本共産主義運動の政治的思想的頹廃の反映をみる。そしてまた、それに重なつたものとしてスターリン主義の束縛をはなれた国際共産主義運動が、イタリヤ的、ユーゴ的、ポーランド的、また中共的、アルバニア的分岐を生みだしている状況の反映をみる。つまり、そこには過去における運動の頹廃と、その克服過程の不徹底さにたいする反乱とも称すべき性質のことと、二十世紀後半における革命と革命党のイメージの追求、あらたな歴史的段階における社会主義運動の再生への努力とも称すべきものとがいくつと今日の過渡期の状況をつくりだしている。

したがって、単純な反中共派でなく、それゆえに単純なソ連派でもありえないという自主的な立場の確立が追求されるべきなのである。また、たんなる反日共というきづなによる連帯や、国際権威主義にもとづく「結集」を拒否する視点も、このような状況認識に基礎をもっている。現在ではどのような集団であれ個人であれ、このような過渡期における自立的追究を試みるすべてのものの同格が宣言されなければならない。そのうえで、結集と連帯を云々するまえに、それぞれの歴史的認識を賭けたきびしい政治的区別が必要なのである。われわれ統社同が、「こえ」や「社革」の政治的思想的立場を批判し、トロツキズム諸派の政治的立場を否定する立場をつらぬくゆゑ、そのためである。

あたらしい前衛党派は、観念的な前衛論議のなかからは決してうまれないであろう。たとえ、ソ連派的反日共的連合が成功したとしても、それは時代の要求にこたえる党とはみなすことができないであろう。また一部の人々がいう、反帝反スターリン主義、反日共的という共通項に連帯のキズナを求めることも、そのそれぞれの言葉においてすら、政治的意味を異にしているかぎり、生産的なものをもたらずと期待することはできない。つまりところ、あたらしい党派は、今日の時代に適合し、わが国の階級闘争の現実に機能しうる明確な政治的方向の創造と、その大衆化、物質化においてのみ語ることができる。

今回の結果がわれわれからみていかに錯誤に満ちたものであつたにしても、わが国における新たな前衛結集への真剣な試行の一つであることを否定しない。

かれらであろうと誰であろうと、真にわれわれを含むさまざまな集団との協力と共同をのぞむなら、その点についてのわれわれの側の基準はすでに幾度となくあきらかにされてきている。それは、あらたに成立した「準備委員会」にたいしても、また参加しなかつたすべてのグループにたいしても、協力と共同の拡大をのぞむ、われわれの積極的な姿勢をふくんでいるものである。

五

ところで、過日の会議には、「こえ」「社革」以外の活動家が参加したために「こえ」

「社革」の路線と、本質的にたいする批判がみられ、指導部は深刻な自己批判に迫られたと伝えられる。

同時に、「準備会」は、その内部にまことに相異つた意向と潮流をかかえこむこととなり、反代々木派連合として発足することとなつた。この結果は、過去における五〇年分裂当時の国際派あるいは六一年分裂における「社革新」が残した教訓に照らしてみても、その前途にいつそうの危具を抱かせるものである。

六

あらためてことわるまでもないことであるが、われわれは少数派に自足するものでもなければ、あらたな前衛形成のための多数派の結集それ自体を拒否しているのでもない。その過程はいかに困難であり、屈折に満ちたものであれ、われわれはさまざまな前衛志向の諸集団、活動家諸君の共同の事業の一員として、たゆまざる努力を積み重ねるものである。

相互不理解を克服する対話を

― 統社同の同志諸君に

内 野 壮 児

組織統一準備委員会の方向にたいして、共産主義諸集団の一つの最初の公式の批判が、統一社会主義同盟によつておこなわれた。統社同機関紙「平和と社会主義」四月二十八日号（第七四号）に掲載された、統一社会主義同盟全国委員会書記局の「前衛形成をめぐるわれわれの見解」がそれである。「共産主義者の結集と統一をめざす全国会議組織統一準備委員会・発足にあつて」と副題されている、この文章は、四月十七日付となつてゐる。全国会議の「まとめ」と「よびかけ」は、「日本のこゑ」四月十二日号および十九日号、「新しい路線」四月十一日号でそれぞれ発表されているから、この文章が書かれた時点で、統社同の同志諸君は、これら二つの文書も検討されたものとみななければならぬ。批判者が誰であれ、われわれはこうした公然たる批判を歓迎する。とくに統社同の同志諸君の場合はわれわれの立場からみれば、その見解にはすくなく事実の誤認が含まれており重大な意見の相違があるが、基本的な見解の中には多くの共通点もあり、有効な対話によつて相互理解を深め、一致点と組織的協力を拡大する可能性があるからである。またそこには、「まとめ」や「よびかけ」のなかでは解明されていない問題も提起され、それにたいする統社同の見解も表明されている。これらの問題にたいするわれわれの態度をあきらかにすることは、結集と統一の事業にとつて、要求されていることでもある。

―

統一社会主義同盟がわれわれがすすめようとしている当面の結集の事業に反対し、参加しないという態度をとつてきたことはよく知られている。「前衛形成をめぐるわれわれの見解」（以下「見解」と略称）は、この態度をあきらかにした六四年十月の統社同全国委

員会決議の基本点を再確認しているが、この基本点のなかにこそ、事実によつてしだいに明白な誰の眼にもあきらかなりつつある誤解と対話を必要とする問題が集中的に含まれていると私は思う。

第一の誤解は「結集」においては日共第八回大会綱領のワク内において革命の綱領路線を設定」しているという誤解である。全国会議の「まとめ」は、われわれの建設しようとする党の政治路線の基礎をつぎのようになっている。

「日本の労働者階級、勤労国民の現実的な要求に根ざす具体的な闘争を、平和共存、平和と民主主義と社会進歩をめざす反独占民主的改革の方向にそつておしすすめることで大衆に服務する真の前衛党、そのことを通じて現代において全人類の解放をめざすプロレタリアートの国際連帯の新しい道の団結に寄与していくような党をつくる。

このことはソ連共産党第二十回大会以後に追求されるようになった国際共産主義運動の新しい路線を、われわれの国において独自に生かそうとするものであり、またモスクワ宣言・声明にもつらぬかれた基本的なたたかひの方向を高度に発達した資本主義国（帝国主義）国家独占資本主義体制）において、各国共産党とともに創造的に発展させていくことでもある。」

成心なしに読めば、準備委員会がこれからなりあげようとしている革命路線が、「見解」のいうようなものでないことはあきらかである。

第二の誤解は「国際権威主義」という非難である。「まとめ」は日本の労働者階級と共産主義者の自主性を土台にすえてモスクワ宣言と声明にたいする態度を規定している。われわれの建設する党の権威は、みずからの革命的実践を通じて、日本の現実のなかで築きあげられるものであり、こうしてプロレタリア国際主義を正しく発展させることができることを明白にしている。現代と日本の現実、労働者階級の闘争から生まれる社会主義への日本の道の探究と、そのための具体的闘争こそ共産主義者の自主性の真の試金石である。

「まとめ」をつらぬくものは日本労働者階級の闘争を国際労働者階級の闘争の一部とみなしながら、日本の国民的特殊性の上に立ち、社会主義への日本の道のための斗争を創造的に発展させながら、国際共産主義運動の新しい統一のために貢献するという見地である。

われわれは日本の運動に根づかい国際權威主義がわれわれの間で完全に克服されているとはいわない。だが日本の共產主義者の自主性を堅持しながら、現代にふさわしいプロレタリア国際主義の内容を明白にし、実践の上に生かそうと決意している。各国の運動の多様性と自主性にもとづいて、現実の歴史に根ざした国際共產主義運動の發展法則であり、世界社会主義のための斗争の利益は、その実現を要求している。日本の共產主義者の自主性といつても、^(第一)代々木のような明白な民族主義的自主性もある。共產主義者が必要とするのは眞の労働者の自主性である。ここには統社同の同志諸君との間になお討論を要する問題がある。だがわれわれの原則的立場を国際權威主義というのは、客觀性を失つているといわなければならない。

第三に、結集には「みづからを日共の正統派として位置づけるという不毛な発想」があるという見解に含まれる問題点である。この見解を正しく評価するためには、そもそも、「正統派」とは何かということが明確にされなければならない。自ら「正統派」をもつて任ずる場合、組織發生の歴史的由来を中心におき、自己の組織が日本共産党の組織的嫡流であるが故に、理論的政治的にも正しく、自己以外の諸潮流や集團の価値を判定しうる政治的權威を生れながらに与えられたものであるという見解がある。この場合「正統派」意識が絶対化されて、一切の行動の基準となり、他の集團にたいする侮蔑となる。こうした「正統派」意識が笑うべきものであることはいうまでもない。それはマルクス・レーニン主義とは縁もゆかりもない、ブルボン王朝の正統派意識である。

だが別の「正統派」意識もある。日本の共產主義運動で、日本共産党が革命的事業を果し、革命的な伝統をつくりあげてきたことを認めるとともに、自分たちの集團の事業が、この革命的な伝統の繼續であり、發展であるという立場をとり、その根拠を、自己の思想と理論、政治方針と組織方針の正しさ、政治的実践の中におく立場である。革命的伝統の繼承者としての自負は、日本の共產主義運動の過去を「聖化」することを意味しない。いな、その深刻な歴史的欠陥を認識しその克服の道を理論的、実践的にも探究するものこそ眞の革命的伝統の繼承者なのである。われわれはこうした「正統派」意識を、正当なものとして承認する。

共産主義運動の現在の状態のもとで、なんらかの意味で自己のこうした正しさを主張する「正統派」意識がなければ、そもそも現在乱立している諸集団は成立しえない。それとも統社同の同志諸君は、自己を一切の過去の革命運動の歴史、共産主義運動の歴史から、断絶したものとみなしているのだろうか。

ある意味では、統社同の同志諸君こそいつも「正統派」意識がよいとわれわれは思う。諸君が「社革」から分離したのも、自己の思想、理論、方針の正しさを確信して、たとえ同じ共産主義者でも、まちがいの多い共産主義者とは、一つの組織を形成しえないと判断したためではなかったのか？ 現在も諸君はその路線が、他の集団に優越する正しいものであることを確信している。だがその確信が、客観的事実を見失わせたり、同一性のあるところに、ことさらに異をたてようとする態度に転化すると、それは本質的には、日共流の「正統派」意識と変りのないものになるだろう。

われわれは理論と実践において、日本共産党の過去、現在の誤りを克服した真の共産主義的大衆的前衛党の建設をめざしており、われわれの立場の正しさにたいする信念をもっている。だがそれは、意見を異にする共産主義者の批判に耳をかたむけ、誤りがあればそれを改めようとする態度と矛盾するものでもなければ、排除するものでもない。われわれは日本の労働運動における共産主義運動とマルクス・レーニン主義党の前衛的地位を承認することにその立場の基礎をおいているが、現在の新しい条件と、日本の共産主義運動の歴史的特殊性のために、社会党の内部やそのほかの分野に、前衛を志向する多くの活動家が生れていることの重要性を否定するものでない。われわれはこれらの諸君と統一戦線樹立のためばかりでなく労働運動、民主主義的諸運動の革命的前進のために、未来の労働者階級の単一の前衛政党组织の展望のなかで協同しうるであろう。統一戦線の原則と方法がそうである^(この場合は、相互の)より同格をみとめ合うことなしには成立しえないことは当然である。

第四に、以上すべてのことと関連して「反代々木―反中共―親ソ連という不毛な発想」というのは、いかにもおかしい。いつたい統社同は反代々木、反中共ではないのか、またすくなくとも平和共存路線の問題では親中共でなく親ソ連ではないか。統社同を知つてい

る大衆はそう信じている。ところが諸君はそれを不毛な発想だという。労働者は何が何だかわからなくなつて混乱するばかりである。

正統派問題については、これ以上いふ必要はないであろう。

二

いまわれわれが批判してきたような問題点を含む見解を再確認した上でのべられている「共産主義者の統一」についての統社同の同志諸君の見解とわれわれにたいする批判には、大きな疑問がある。

統社同の諸君は「こえ」と「社革」の合意は、国際共産主義運動の統一の回復を主張する、国際的主流の見地からひきだされているという。われわれはこの見解は誹謗にちかいと思う。「まとめ」は社会主義陣営の不統一、世界共産主義運動の分裂状態が、帝国主義の侵略性の増大を許す一因となつており、その克服が全人類の運命をになうものとなつてゐることを指摘したのち、つぎのように言つてゐる。

「まづ何よりもすべての社会主義国、民主的・革命的勢力の行動の統一が緊急に必要とされており、その上にたつて、今日の時代に即応した世界共産主義運動の真の統一がたしかいとられねばならない。この事業に成功するならば、われわれは平和と平和共存そして民族の独立を強めながら、資本主義から社会主義への世界史的転換の過程を大きく前進させるより確実な展望を開くことができるであろう。」

これが世界共産主義運動の統一とその意義にたいするわれわれの立場である。この立場と、ソ連共産党や多くの国の共産党の立場との間には基本的な一致がある。だがわれわれの見解が、あたかも外国の共産党の見地に由来するものであるかのようにいうのは、準備委員会に結集した共産主義者とその志向にたいする客観的考察を欠いているといわなければならない。統社同の諸君がこの問題を真剣に批判しようとするなら、国際的統一にたいする、われわれの方針それ自体を具体的に批判すべきである。

国内的統一について、準備委員会に参加している共産主義者のあいだにおさまさまのニュアンスがあるのは事実であろう。だが、われわれは、「日本の共産主義者の統一をめ

さし、共産主義の結集をすすめる党組織をつくる」(まとめ)という基本点では統一した意志をもっている。「見解は『準備委員会』以前の合意を基礎にするなら、結局は日本共産党の統一の回復をめざす以外にはすみようがなからう」という。あたかも日本共産党との統一の回復をめざすことは誤りであるかのようなのである。だが日本の共産主義運動の根本的統一を問題にする場合、日本共産党との統一の問題をさけて通るわけにはゆかない。ただそれは六全協的統一ではありえないし、あつてはならないのである。

「われわれは、日本共産党(代々木)指導部のもとにある党員諸君が、その指導部の誤りを正し、その党の根本的改造と共産主義運動の統一のために奮闘することを期待する。われわれは将来必ず単一の党に統一される日のあることを確信し、そのために奮闘する」。(まとめ)われわれ自身が、労働者階級に基盤をおくマルクス・レーニン主義党の建設に努力し、強大な政治勢力となることこそ、統一の回復を可能にする条件である。この見解をわれわれは、日本の階級斗争の現実、労働運動、民主主義、社会主義運動の实情、労働者階級と社会主義のための斗争の利益からひきだしている。統社同の同志諸君が、このわれわれの見解と準備委員会の運動の現実を、虚心に、全体的に検討されることをのぞむ。

三

統社同の同志諸君は、統一を主観的に願望するだけではだめで、現在、わが国で数多くの「非共産党左翼」の諸集団が分立している状況、それを生みだした原因とこの状況の歴史の意味を理解しなければならないと主張する。新たな前衛党創出の努力も、単なる教条や願望にもとづかぎり不毛なものに終らざるをえないという。

(22)

この主張は基本的に正しい。まさにこの問題にたいする見解の分岐こそ、諸集団の分立の重要な一つの原因である。われわれも準備委員会の仕事のなかでこの問題の解明をすめようとしている。ここにこそ、もつとも真剣な討論を必要とする核心的な問題がある。これについて「見解」の四で述べられている統社同の諸君の意見にたいしてわれわれの見解を明白に述べ、討論を発展させることが重要であるが、紙数の関係で、やむなく次の

機会に譲る。

われわれは統制下の諸君が、準備委員会を批判しながらも、なお共同と協力の拡大をのぞむ態度を表明していることを高く評価し歓迎する。われわれも積極的に協力関係をうちたて、発展させたいと思う。こうしてこそ相互不理解を克服する真の対話が可能となり、組織的統一の道がひらけるであらう。

準備委員会事務局から

第二回準備委員会は、政治方針委員会、組織方針委員会の設置を決めるとともに、「在京の準備委員および出席可能な準備委員で、二つの方針の基礎にある問題や、それをどんな方法でつくっていくか、どういう内容がもとめられているか、さらにどんな委員会の構成にするかなどを検討し、今回の提案の準備をする」ことが決定された。

このための会議は、四月三十日、五月四日、五月十三日に開かれ、意見交換をつづけてきたが、五月十九日に、第三回準備委員会への提案を最終的にまとめあげる会議がもたれる予定である。

この会議では、各準備委員から、政治方針・組織方針を作成するにあつての原則的な態度の問題、政治方針・組織方針の内容として検討されるべき諸問題、その作成にあつて、結集をもとめるすべての共産主義者の参加と協力を組織する方法の問題などについて意見がだされ、それを一定の時間的な見通しをもつた具体的な計画にまとめあげる努力がつづけられている。こうした提案や第三回準備委員会の討議・決定などについては、次号で詳細に報告する予定である。

以上

会報 第二号 正誤表

頁	行	誤	正
一八	二行目	：：明白な誰の眼にもあきらかになりつつある誤解	：：誰の眼にもあきらかになりつつある明白な誤解
一九	四行目	：：自主性にもとづくは	：：自主性にもとづく統一は
一九	六行目	：：といつても、代々木	：：といつても、最近の代々木
二〇	五行目	：：いよい	：：つよい
二〇	二行目	：：あるように同格を	：：あるように、この協同は、相互の同格を
二一	一三行目	社会主義国「	社会主義国、
二一	一七行目	：：であろう。	：：であろう。」
二二	七行目	われわれは、	「われわれは、
二二	九行目	そのために奮闘する。一	そのために奮闘する。」 (まとめ)